

伝統的地場産業地域における現状と問題点

——福井県今立町を事例に——

三田村 亜矢子

本論文は、伝統的な地場産業が今日抱えている問題を、福井県今立町の和紙産業を事例に考察するものである。論文構成は、まず最初に日本における和紙産業を概観し、福井県における地場産業の中における和紙産業の特徴を把握した上で、今立町の和紙産業の実態をアンケート調査をもとに工場の地域的分布・生産工程・経営規模・従業員・流通経路などを中心に分析したものである。

今立町の和紙産業は、日本の和紙の生産量の約25%を占め、生産量・生産品目ともに全国一位となっている。当該地域の和紙産業に従事する工場数は、平成4年には、手漉き業45、機械漉き業25、紙加工業5、手漉き業及び機械漉き業6で、合計89である。昭和30年の117と比較すると減少傾向にあるが、昭和55年の86からはほとんど変化がない。工場の立地をみると、大滝47、岩本9、不老11、新在家7、定友9と五箇山地区に78工場が集積しており、その他粟田部に4、杉尾に1、武生市に6となっている。今立町の和紙産業の発祥の地は、五箇山地区で1500年の伝統をもつ。とくに岡本川の清澄で豊富な水量は、その上流域の大滝地区に手漉き和紙業を密集して立地させる一つの要因となっている。冬季の積雪量などの自然的条件に加え、生産性の低い農業地域の女性の重要な副業として発達してきた。

和紙産業が現在直面している問題を把握するために、アンケート調査を行い、45工場からの回答を得た。昭和58年に実施された調査（福井県中小企業課編「越前和紙産地診断報告書」）の結果と

比較しながら、この間の変化の動向に着目した。詳細な数値等の記述はここでは省略する。

業者別に見ると、手漉き業は、経営規模が小さく、労働力は家族従業者に依存している。労働力の高齢化が進み、後継者不足も深刻で将来に対する展望が望めない現状である。機械漉き業は、生産量・生産金額・従業者数ともに手漉き業を上回っており、手漉き業ほど問題は深刻ではないものの、大量な水の使用などから水不足・公害問題に直面している。水の有効な循環利用が求められている。武生市方面に新規に規模拡大した工場が立地移動する傾向にある。

将来について、アンケート調査から各企業が指摘する発展策は、新製品・新デザインの開発、和紙の高級品化であり、生産量の伸びの停滞を付加価値を課すことによって代替させようとする試みである。同時に消費動向を正確に素早くとらえることの必要性が強調されている。

今立町の和紙産業は伝統的な地場産業の一つであり、他の地域における地場産業に共通する問題を抱えている。労働力、とくに後継者の確保の問題など有効な解決策をみだしているわけではない。観光業と関連した活性化も考えられているが、具体的にはいまのところ展開していない。地域経済の一角を支える地場産業が抱える問題は、地域全体にも問題であり、「地域」において産業を維持し発展させる方策が検討されることが望まれている。